

地域の問題点／言い出す勇気と粘りを

谷口吉光（秋田県立大学）

誰でも自分の住んでいる地域をよくしたいと思うだろう。でも具体的にどんな行動をとったらいいいのかわからない場合も多い。先日参加した環境関係のパネルディスカッションで、1人1人が行動することが大事だという話が出たとき、会場の男性から「近所の街灯が昼間もついたらまだ。消したいと思うが、スイッチがないので消せない。どうしたらいいか」という質問が出た。壇上のパネラーからは「市役所に電話で消し方を聞いてみて、らちが開かなければ町内会などを通じて消してもらおうように要請すればどうか」というアドバイスがあった。

短いやりとりだったが、ここには大事な問題が含まれている。私たちの日常生活には「なぜ改善されないんだろう」「直せばいいのに」と思うことが無数にある。昼間も消えない街灯もそのひとつだ。しかし、そうした問題の大部分は、放っておいて改善されるようなものではない（だいたいそこに問題があることさえほとんどの人は気づいていない）。誰かが「おかしい。直した方がいい」と言い出さなければならない。地域をよくしようと思えば、この「言い出しっぺになる勇気」をたくさんの方が持つ必要がある。

もちろん言い出しただけは問題は解決しない。ささいな問題であっても、それを解決するには結構な手間と時間がかかる。以前県立大学の学生たちが「大学に置かれているゴミ箱のなかに、いつもゴミがあふれているものがある」ことに気づいた。それはゴミ箱の大きさとその場所で捨てられるゴミの量が合っていない（ゴミ箱が小さすぎる）からなのだが、それを大学事務局に改善してもらうために、彼らは大学構内（秋田キャンパス）のゴミ箱全部のゴミ量を調査し、小さすぎるゴミ箱を特定し、どのくらいの大きさにしたらいいか検討した結論を大学に提出した。幸い大学は彼らの提案を受け入れ、ゴミ箱を大きなものに代えてくれることになったが、大学の学生自主研究という制度を利用して入念な調査をしたせいもあって、問題に気づいてからゴミ箱が交換されるまで1年半の時間がかかった。それでも最終的に状況を改善できたのは、言い出した学生たちが面倒な作業をやり抜いたからだ。

戦後日本には「民主的な国を作ろう」「農村・農業を近代化しよう」「経済的に豊かになろう」というような大きな目標があった。そのような時代には大きな目標に向かってがんばっていればよかった。しかし、今のような目標喪失の（というより新たな目標を模索している）時代においては、1人1人が身の回りの問題を解決しながら、仲間を作り、地域に根を張り、考えを深め、自律性を育むことが必要なのではなかろうか。

ストークスという研究者の書いた「自分を助けるのは自分」という本には「グローバルな問題にローカルな解決策を」という副題がついている。グローバルな問題も身近な（ローカルな）問題が蓄積されたものだから、グローバルな問題を解決するにはローカルな解決策をたくさん作らなければならないという主張だ。ストークスにならって、「地球的な問題に秋田の解決策を」たくさん作っていいのではないか。

（朝日新聞「あきた時評」 2004年5月13日掲載分を加筆・修正した）